

特定外来生物

# アカボシゴマダラ

昆虫綱 チョウ目 タテハチョウ科 *Hestina assimilis*

生態系被害防止  
外来種リストの区分

重点対策外来種

日本の侵略的外来種ワースト 100

世界の侵略的外来種ワースト 100

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類

クモ類

貝類

植物

## 基礎情報

### 原産地

- ・ベトナム北部～大陸中国南部～東部～朝鮮半島、および済州島など周辺島嶼
- ・別亜種(特定外来生物ではない)が奄美諸島と台湾に分布

### 現在の分布

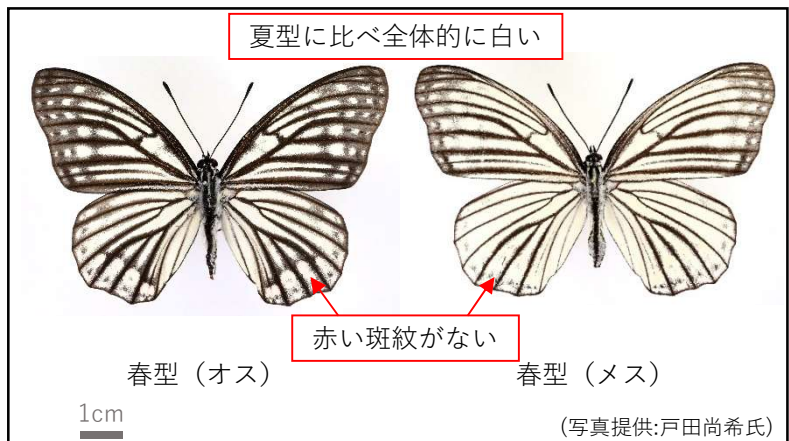
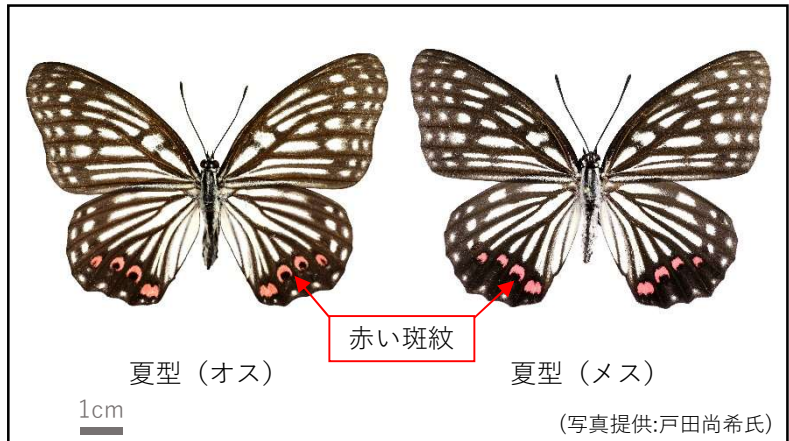
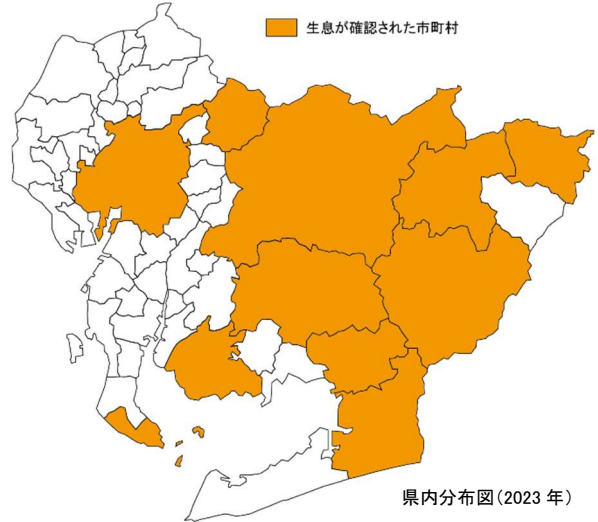
- ・国内では、関東地方各都県をはじめ、福島県、山梨県、静岡県、愛知県、京都府などに定着している。
- ・県内では、名古屋市、三河地方の丘陵部や山間部などで確認されている。

### 侵入の経緯

- ・1995年に埼玉県で一時的な発生が確認され、1998年には神奈川県で繁殖・定着が確認された。
- ・2010年以降は埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、群馬県へと関東全域に分布を拡大した。
- ・人為的な放蝶により広がったと考えられる。

### 形態

- ・在来種ゴマダラチョウの近縁種で、成虫が前翅長 40～53mm になる大型のタテハチョウ。
- ・翅は黒地に白の斑紋があり、白黒の縞模様に見える。
- ・季節型があり、夏型の成虫は後翅後部に赤い斑紋(アカボシの名の由来)を持つ。
- ・越冬した幼虫から羽化する春型には、赤い斑紋を持たない個体が現れることがある。春型は夏型に比べ黒色の部分が少なく、全体に白っぽく見え、特にメスではその傾向が強く現れる。
- ・幼虫は背面に鱗片状突起が 4 対あり、3 対目の突起が他よりも大きくなる(62 ページを参照)。



生息環境

- ・里山から都市まで、さまざまな環境に生息する。
- ・幼虫はエノキ類を食樹とするため、エノキ類の生育する場所によく見られる。

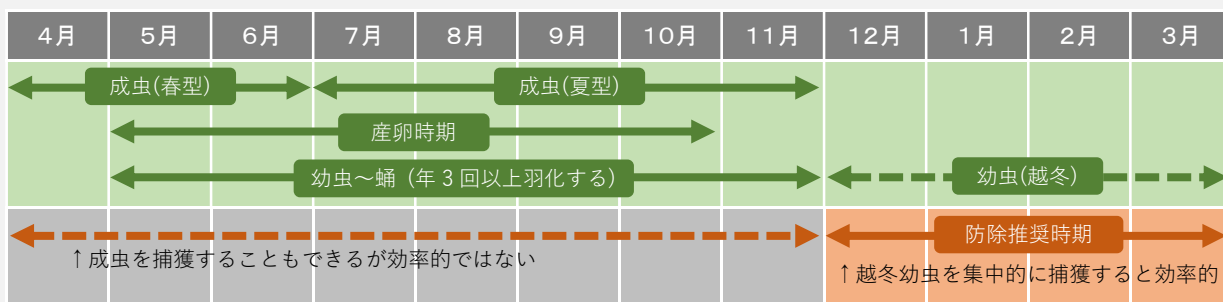
生態・ライフサイクル

- ・成虫はクヌギ、コナラ等の樹液や花の蜜を吸う。樹液の出るところでは数頭が集まっていることがあり、町中の花壇にも吸蜜に訪れることがある。幼虫はエノキ類の幼木につき、葉を食べて成長する。
- ・繁殖期は5～10月。成虫は春から秋まで繰り返し発生し、少なくとも年3回発生する。
- ・オスはテリトリー(なわばり)を持ち、中に入ってきた他のチョウを追いだすことがある。
- ・産卵数は約200個。幼虫の食樹であるエノキ類の葉に産卵する。
- ・幼虫で越冬する。エノキ類の幼木の幹についた状態で越冬することが多いが、根元に落ちた葉の裏に潜り込むこともある。



幼虫の食樹となるエノキの葉

【ライフサイクル・防除推奨時期】



類似種との識別ポイント

- ・成虫の類似種として、ゴマダラチョウ(在来種)がいる。
- ・幼虫の類似種として、ゴマダラチョウ(在来種)、オオムラサキ(在来種)がいる。

【成虫の類似種】

ゴマダラチョウ(在来種)



①赤い斑紋がない

- ①後翅後部に赤い斑紋がない。
- ②春型と夏型で大きな色の違いはない。

成虫の前翅長 32～50mm になる大型のタテハチョウ。翅は黒地に白の斑紋があり、白黒の縞模様に見える。里山から都市まで、さまざまな環境に生息する。後翅後部に赤い斑紋はない。アカボシゴマダラ(夏型)には目立つ斑紋があり、識別ポイントとなる。

成虫はクヌギ、コナラ等の樹液や花の蜜をエサとする。幼虫はエノキ類につき、葉を食べて成長する。繁殖期は5～9月、成虫は年2～3回発生する。エノキの根元に落ちた葉の裏に付着して、幼虫で越冬する。

- 哺乳類
- 鳥類
- は虫類
- 両生類
- 魚類
- 昆虫類
- 甲殻類
- クモ類
- 貝類
- 植物

ゴマダラチョウ (在来種)



ゴマダラチョウの成虫



ゴマダラチョウの越冬幼虫

【幼虫の類似種】

類似種	識別のポイント
アカボシゴマダラ (特定外来生物)	<ul style="list-style-type: none"> <li>背面に鱗片状突起が4対あり、3対目の突起が他よりも大きい。</li> <li>尾の突起は閉じている。</li> </ul> <p>突起が4対 閉じている</p>
ゴマダラチョウ (在来種)	<ul style="list-style-type: none"> <li>背面に鱗片状突起が3対ある。</li> <li>尾の突起は開いている。</li> </ul> <p>突起が3対 開いている</p>
オオムラサキ (在来種)	<ul style="list-style-type: none"> <li>背面に鱗片状突起が4対あり、ほとんど同じ大きさ。</li> <li>尾の突起は開いている。</li> </ul> <p>突起が4対 開いている</p>

影響・被害

- ・オオムラサキ、ゴマダラチョウ、テングチョウ、ヒオドシチョウなど、幼虫期にエノキを利用する在来チョウ類との競合が懸念される。
- ・年1回発生するオオムラサキなどに比べ、アカボシゴマダラは少なくとも年3回発生するなど繁殖力が高いため、大きな影響を与える可能性がある。

生息・被害の確認方法

- ・成虫は、産卵対象であるエノキや、エサとなる樹液を出す樹木の周りなど、集まる可能性がある場所で目視により確認する。双眼鏡等を併用するとよい。春型よりも赤い斑紋が目立つ夏型の成虫の方が識別しやすい。
- ・幼虫は、エノキ類の幼木の幹や、根元に落ちた葉の裏についた越冬幼虫を目視により確認する。冬季以外でも幼虫は確認できるが、体色が緑色のためエノキの葉にまぎれやすい。
- ・既存の研究調査に関する文献や目撃情報をインターネットや図書館で探す。
- ・地域の住民や自然観察会、専門家などを対象に聞き取りやアンケート調査を行う。



エノキ幼木周辺での越冬幼虫の確認

## 防除方法

- ・チョウ類など飛翔能力が高い外来昆虫は広範囲に拡散しやすいため、周知の徹底により野外への放蝶をさせないことが重要になる。
- ・成虫は、捕虫網を用いて捕獲する。幼虫は、見つけ採りにより捕獲する。

## 推奨時期

- ・成虫は、4～11月の発生時期に防除する。春型(4～6月に発生)よりも夏型(7～11月)の成虫の方が、赤い斑紋が目立つため類似種(ゴマダラチョウ)との識別が容易である。
- ・幼虫は、12～3月に越冬幼虫を集中的に捕獲すると効率的に減らすことができる。

## 具体的な防除方法

- ・これ以上野外への放蝶をさせないよう、パンフレットの作成など普及啓発に努める。
- ・成虫は、産卵対象であるエノキや、エサとなる樹液を出す樹木の周りなど、集まる可能性がある場所を探索し、捕虫網を用いて捕獲する。捕獲した成虫は、捕虫網の上から胸を強く圧迫するなど、原則としてその場で殺処理する。
- ・幼虫は、エノキ類の幼木の幹や、根元に落ちた葉の裏についた越冬幼虫を見つけ採りにより捕獲する。捕獲した幼虫は、踏みつぶすなど、原則としてその場で殺処理する。
- ・殺処理後の最終処理は、一般廃棄物として廃棄(各自治体の基準に従う)する。



捕虫網による成虫の捕獲

## 作業上の注意点等

- ・防除作業を行う前に、対象地の所有者・管理者の承諾を得る。必要に応じて、地域住民にも防除の目的や活動内容を周知する。
- ・生きたまま保管・運搬等することは原則禁止されているため要注意(行う場合は手続等が必要)である。
- ・樹液を出す樹木には、スズメバチなど危険な昆虫も集まるため注意を要する。
- ・比較的ゆっくり飛ぶため子どもの虫取りで捕獲されることもある。持ち帰ること、他の場所で放すことは外来生物法に抵触するため注意が必要である。



樹液に集まるオオスズメバチ

## 出典・参考資料

- ・侵入生物データベース > 日本の外来生物 > 昆虫類 > アカボシゴマダラ (国立研究開発法人 国立環境研究所)  
<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/60400.html>
- ・特定外来生物同定マニュアル 昆虫類 (環境省 自然環境局) [https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/manual/6hp\\_konchurui2.pdf](https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/manual/6hp_konchurui2.pdf)
- ・愛知県の外来種 ブルーデータブックあいち 2021 (愛知県,2021) p.87 アカボシゴマダラ (間野隆裕・戸田尚希)

哺乳類

鳥類

類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類

クモ類

貝類

植物